

デ・レーケ と富山

前回の説明のとおり、「小滝群」か「滝・瀑布」がある河川は災害を受けにくい。そこで、デ・レーケは常願寺川の源流を視察した時、「滝」を探したのだという。そして、やっと支川の称名川で滝を見つけた。有名な称名滝である。デ・レーケは、同行者に「滝があったね」（アイ・ファインド・ア・フォール）と言ったという。権威のあるデ・レーケが滝の話をしたことから、いつしかデ・レーケが「これは川ではない滝である」と言ったというエピソードに変わっていったのだろうと上林氏は述べている。

さて、当時の土木部長に相当す

る役職で富山県に勤務していた高田雪太郎は、明治26（1893）年から、常願寺川に続き、神通川の改修計画を進めていた。高田は明治28（1895）年5月に上京した際に、デ・レーケに相談し、その後、内務省土木局に神通川改修計画の指導のため、デ・レーケの派遣を再度要請した。これが実現し、同年8月1日から12日までデ・レーケは再び富山を訪れた。

実は、神通川の調査については、

デ・レーケが

最初に富山を

訪れた明治24

（1891）年

8月に、半日

ではあったが

すでに行つて

いる。内務省

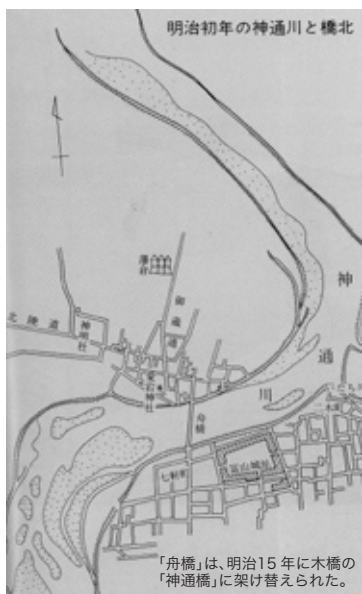
に提出された

報告書で、神

通川について次のように述べている。

「毎年のように神通川が氾濫して、富山市が洪水に見舞われる要因は、市内の北西部に位置する屈曲部で川幅が狭くなっており、洪水流出量の約半分の水量しか流過できないこと。それに、最近架設された神通橋によつて流れが阻害されている」

当時の神通川は、左図のように、蛇行して流れていた。①



「とやまの河川」（富山県）より